



英虞湾の宝石

間崎島のしおり



伊勢志摩国立公園の代表的風景、真珠のふるさと、英虞湾の真ん中にぽっかり浮かぶ自然いっぱいの間崎島によろこそ。

この島は、自然豊かな伊勢志摩の中でも特に素朴な風景をとどめ、手つかずの自然がいっぱい残っています。本土にあるような遊ぶ場所、洒落た店やレストラン、コンビニはまったくありません。車も走っていません。若者がファッションブルに闊歩するということもありません。

間崎島にはいつものんびりした空気が流れています。磯の香のする風が吹いています。今の日本人に最も不足している精神的な余裕、自然との対話、人類の故郷である海にふれあうことができます。

このような素晴らしい自然環境で生活をしたなら全身の細胞が活性化され、寿命が延びるのは間違いありません。

どうか、一度間崎島を訪れてみてください。それを機会に間崎島のファンになっていただき、たまには普段の喧騒を忘れて命の洗濯をしてみてください。

いつでも間崎島は必ず手つかずの自然でやさしく皆さまをお迎えいたします。

間崎島のプロフィール

間崎島は三重県志摩市志摩町和具に属し、真珠養殖業で有名な伊勢志摩国立公園の南部、英虞湾のほぼ中央に位置している島です。北緯34度15分、東経136度48分で、志摩町和具から4.1キロ、阿児町賢島から3.0キロの距離にあります。島の周囲は7.4キロ、面積は0.36平方キロメートルの扁平な島で、集落は島の西部に集中しており、人口は平成20年6月30日現在で159人です。



間崎の鳥瞰図（西側から東をみたところ）

気候は四季を通じて温暖な気候で、冬季においても氷点下を下回ることは極めてまれで、海に囲まれているため、夏季においても真夏日は比較的少ない恵まれた気象条件下にあります。平均気温は約16度C、最高気温30～32度C、最低気温は0度C前後です。年間降水量は1,400～2,100mmと年によってばらつきが大きくなっています。

間崎島の玄関口、間崎漁港から東に向かって島の中ほどには市道が一本走っています。途中には唯一の小学校がありましたが、徐々に児童数は少なくなり、ついに数年前に廃校となってしまいました。

真珠養殖業以外に特に産業もないことから、過疎化が目立っており、現在の高齢化率（総人口に占める65歳以上の人口）は約70パーセントに達しようとし

ています。

間崎島への渡航手段は自家用船のほかは、定期船が運航されており、阿児町賢島港～間崎漁港～和具浦港の間に1日9便が運航されています。所要時間、料金は阿児町賢島港～間崎漁港間が15分、360円、間崎漁港～和具浦港間が10分、240円となっています。運航船舶は志摩マリンレジャー（旧近鉄志摩観光汽船）の19トン、80人乗りの「おくしま」です。

間崎の歴史（間崎誕生編）

志摩町片田にある三蔵寺の「三蔵寺世代相傳系譜」という書物には次のような記述が見られます。

間崎島の歴史は、476年前、天文元年（1532年）まで遡ります。その頃、日本は室町時代で、応仁の乱が終わり、まさに戦国時代の只中で、世の中は乱れ、諸国動乱、群盗が多発して下剋上の時代にありました。

その頃の志摩町和具は「矢納村」と呼ばれておりましたが、映画「七人の侍」に出てくるように、盗賊が群集して押し寄せ、衣食などの掠奪が多発していました。そのため、村では困窮する者が多くなり、そのような難を逃れるため、矢納村から4軒の人々が間崎島に移住しました。これが、間崎島に人が住んだ始まりとされています。

その当時、志摩町でいちばん古くて社格も高く、栄えていた三蔵寺は、飢えにあえぐ村民を救うために寺の財産を売却し、その窮状を救いました。そのおかげで、矢納村はしばらくして平穏な生活を取り戻し、やがて動乱も終息しました。その

ころに村名を「矢納村」から「和具村」に改称しました。永禄7年（1564年）ごろのことです。

古文書には、以上のような記載がありますが、一方で次のような昔話も残っています。

『いつの頃までであったか、間崎は立神村（現在の阿児町立神）の地籍であった。ある年の冬、真っ白な鶴が一羽舞い降りたが、不思議なことに、それは間もなく



エキゾチックな雰囲気の間崎漁港公園の落日

死んでしまった。立神村の庄屋は、村人の注進らよって大いに驚き、直ちにこれを藩の奉行に訴え出た。奉行は直ちに出張し、庄屋を呼び出し、「鶴は殿様の召し上がる鳥である。百姓どもが口にするべきものではない。なお、また鶴が訳もなく死ぬものでもない。殺したわけを詳しく申し述べよ」と厳しく詰問した。

庄屋は大いに恐縮して、「決して村人が殺したものではありません。死んでいたのを見つけて直ちに注進申し上げたまでである」と詳しく答えたが、奉行はなかなか納得しない。最後に奉行は語気を強めて「この地はしかと立神領か」と尋ねた。庄屋は何と言っても聞き入れてくれないので、ここぞ、と力を込めて、「どこの領地かは存じませんが、全く立神領ではありません。和具の船が時々立ち寄りますか

ら、或いは和具領かも知れません」と答えた。これら縁となり、ついに和具村に属することとなった。』

間崎の歴史（昔の暮らし編）

間崎島は距離的には志摩町よりも阿児町に近いということになりますが、先に述べてきましたような事情もあって草創当時から志摩市志摩町の行政区となっています。

産業としては、昔から漁業が中心でした。「いわし」の曳き網が主で、



賢島、和具間を結ぶ定期船「おくしま」

付近で営まれる鰹漁業の生き餌はこのものに依存していました。鰹を釣る場合は、生きた餌が必要となります。この餌を確保する責任者を「餌買い」といい、各船には必ず1～2名がいて、入港する港にあらかじめ出向き、餌を確保して水揚げ、餌の積み込みをする、というのが一般的でした。明治時代までの和船時代にはいわしが英虞湾一帯でもよく獲れ、間崎は立地上条件がよく中心的役割を果たしていました。海には漁業権といって、海域を仕切って漁をしてもよい部分を各地域に割り当てていますが、間崎は英虞湾の中心に位置するため、隣の浜島、御座、鶴方、立神などの漁場にも入漁することが許されていたからです。明治時代に入ると、片田、布施田地区の曳き網業者が姿を消し、もっぱら和具と間崎住民に限られるようになりました。ことに間崎地区においては、他にみるべき産業がなかつ

た関係から、この曳き網漁は財源確保の重要な漁業であり、春から秋にかけて餌としての近海鯉漁船はもちろんのこと、北は三陸方面から南は四国、九州にまで顧客を持ち、「間崎の餌鯉」としてよく知られたものでした。昭和22年当時、間崎地区には21軒がこの曳き網漁を営んでいました。しかし、鯉漁は漁場が遠ざかるに従い漁船も大型化され、漁業基地も各地に移転するようになり、英虞湾口に大型定置網が張られるようになってから、いわしの群れも次第に少なくなって衰退していきました。

間崎の歴史 (真珠の誕生編~その①~)



珠貝潜きの風景(昔は海女が海に潜ってアコヤ貝をとった)

このような生活をしていた間崎島に大きな転機が訪れます。明治26年(1893年)、間崎島の北側に浮かぶ多徳島で真珠養殖の研究をしていた御木本幸吉が世

界ではじめて半円真珠を作り出すことに成功したのです。それからも大変な紆余曲折がありました。ついに御木本幸吉は、十数年の歳月が流れた明治40年に完全な真円真珠を作り上げました。その後、真珠養殖の技術がほぼ確立され、大正9年頃には実用化されました。この技術の実用化とともに志摩の英虞湾周辺の地域に真珠養殖が爆発的に広がります。養殖技術が広まってくると英虞湾のほぼ

中央に位置し、条件に恵まれている間崎島は、一躍真珠養殖業のメッカとなりました。真珠養殖は始まった頃には、「地撒き養成」といって挿核した貝を海底へ撒いて育てるのが主流でした。その後「垂下式」（ネットに入れて筏から吊るす方法）に進化し、大幅に歩留まりの向上が図られました。また、使用する母貝も天然に海底の岩石などに稚貝が付着したものを使用しました。この貝は、何ら人工的な処置をしないまま自然に大きくなります。3、4、5年と経過して大きくなった貝を母貝と称し、「玉貝潜き（たまがいかずき）」といって海女が英虞湾に潜って獲っていました。明治の終わりから戦前までは、毎年1回ないしは2回玉貝の口開け（解禁）と称して、小学校まで休校し、村中総出でこの仕事に従事したほどでした。

大正から昭和にかけては、真珠養殖業の黎明期で第一次真珠普及時代といわれるようなときです。この頃は、英虞湾にも今のように筏はなく、漁場は広々としていました。徐々に広まりつつあった黄金期を迎えるのを前にして、大東亜戦争が始まります。

間崎の歴史（真珠の誕生編～その②～）

戦争はそれぞれの産業に大きな被害をもたらしましたが、真珠養殖業も例外ではありませんでした。それでも終戦後2～3年後には戦前に廃業した業者の復興も見られるようになってきました。終戦直後の為替相場は1ドル＝50円でしたが、時代が進むにつれて、どんどん円が値下がりし、最終的には360円に落ち着きました。この円安は真珠の輸出業者にとっては大変有利なことでした。

しばらくして漁業法の改正もあり、真珠養殖業者が急増しました。間崎島は特に養殖の条件に恵まれていたこともあって、調子が悪くなってきた他の産業から大勢の人々が真珠養殖業に転向するようになりました。このようにして真珠業者が増えてきますと、今度はまた別の問題が起こってきました。それまで広々としていた英虞湾は、真珠の筏が増えて自然に発生していた真珠母貝を採る場所が少なくなってきたことです。その反面業者は大幅に増えましたから、次第に養殖に使用する母貝が不足するようになってきました。

そこで、組合では人工的にアコヤ貝の採苗を行うようになりました。業者は自ら母貝の採苗・養殖をするようになり、卵から母貝を育て自給自足が進んでいきました。これが軌道に乗ってくると、生産額は爆発的に増え、島は好景気に沸き立ち、ラジオ、テレビ、電話などの普及率は全国でもトップを占め、まさに真珠王国といった趣でした。

最近の真珠養殖事情

その後真珠養殖業界は定期的に浮沈を繰り返してきましたが、現在のアコヤ真珠養殖業界は、未曾有の危機に直面しています。近い将来にはアコヤ真珠はなくなっているのではないか、とされているくらいです。この危機が始まったのは20年前の事です。1988年に高知県浦之内湾で、新しい有毒プランクトンが発見され、「ヘテロカプサ・サーキュラリスカーマ」と名づけられました。大きさが約0.02mm前後の渦鞭毛藻で、洋ナシまたは卵のような形をしています。このプランクトンの特徴は、二枚貝だけに毒性がある毒素産出するというもので、

アコヤ貝をはじめとして牡蠣、アサリなどの二枚貝に大きな被害を出しました。

このプランクトンは1983年に香港で見されたのが最初とされており、何らかに紛れて日本に渡った外来種だとされています。



以来、日本各地の湾に飛び火的に伝播し、漁業に深刻な被害をもたらしました。

ヘテロカプサで死んだ真珠貝

英虞湾においても1992年に初めて被害が出始め、以後被害が一円に広がって、アコヤ貝養殖の存亡にかかる事態を引き起こしました。特に夏場になると発生頻度が増え、アコヤ貝がパクパクと息苦しいような症状を呈して最後には死んでしまいました。湾内に吊るしていたネットを上げてみると、中に整然と並べられていた貝がパッキリと開いて死んでいた、という状況が続き、死んだ貝殻は工場の空き地に山に積み上げられ悪臭を放っていました。このプランクトンについては、以後も発生は続いたものの、徐々に被害は縮小していきましたが、それに代って大きな問題が起こってきました。

ヘテロカプサの被害は数年で徐々に落ち着きを取り戻してきましたが、平成6年ごろになって新たに大きな問題が起こってきました。今度は原因不明の感染症が発生してきたのです。

新しく発生した感染症は、ヘテロカプサの被害の被害よりも始末の悪いものでした。貝柱の赤変化といって、養殖中の真珠貝の貝柱が赤く変色し、弱りながら

死んでしまう、という症状でした。健康な貝を病気に感染した貝と同じ海域に吊るしておくと同じ症状を呈するようになることから、ある種のウイルスや細菌が原因だと推測されました。症状が出始めた当初には、その原因として、アコヤ貝の近親交配が進んだため、貝自体の抵抗が弱り、日和見感染のように、普通なら何でもない細菌に感染して死んでしまう、という説やウイルスよりも大きく細菌よりも小さなある種の微生物によって感染する、というようなことも言われました。

しかし、年月が相当経った現在でもその原因は究明されていません。そのような状況ですが、その感染症の性質は、その後の研究によりだんだんと解明されてきました。海水温が13～14度くらいになると赤変の症状が治まってしま



アコヤ貝の浜揚げ風景（貝と身と貝柱に分ける）

ますが、今のところ出来上がった真珠の黄色味が強く、後の加工もしにくいため、仲買業者が敬遠するようです。

また、この中国系の貝は逆に低水温に弱く、2～3月にかけて13度を下回るくらいに温度が下がる英虞湾では、寒さが原因で貝が死ぬという事例が出てきま

うのです。また、中国系などの暖かいところのアコヤ貝が病気に強い、ということもわかってきました。そこで、国産貝と中国系の貝を高配させて、両方のいいところをとった貝の創出にも取り組んでい

した。したがって、現在では、県の水産研究部や三重県栽培漁業センターなどでは低水温に強い国産の貝で、しかも病気にも強いアコヤ貝の開発が進められています。

今後、研究が進むにつれて原因は究明され、徐々に真珠養殖業界も上向きに進むものと思いますが、しばらくはいばらの道が続くようです。

間崎の農業

間崎島は昔陸地が沈み込んでできた典型的なリアス式であるため、比較的高低差があり、平地には恵まれていません。したがって島が小さい上に平坦地が少ないため、農業は見るべきものはありません。田畑は多少ありますが、面積的には大変狭く作業効率も非常に悪いものとなっています。

しかし、間崎島には以前、全国的にも非常に珍しい農業の形態が存在しました。それは「舟渡り農業」と云われるもので、間崎島から船で本土に渡って農業を行うものです。島の人たちは真珠で裕福でしたから、対岸の浜島町の大崎半島や志摩町に農地を所有しており、そこで米や野菜などを作っていました。朝、自家用船に乗ってそれぞれの場所に農作業に向かい、夕刻作業が終わったら再び船で帰ってくるのです。

この農業形態は全国的にも非常に珍しいもので、以前はマスコミがよく取材に来たものでした。現在では、島民の高齢化等の理由により、農業をする人が少なくなってしまうため、この「舟渡り農業」も姿を消してしまいました。

間崎の年中行事

志摩地方は狭い地域とはいいいながら、それぞれの地域が独立性をもって栄えてきたために各地で独自の文化が根付いています。特に間崎は本土と近いといいいながら、海に隔てられた地域であるため行事も少し赴きが変わっているようです。月別に昔から行なわれてきた主な行事を紹介しましょう。

1 月

1日早々 「若と水」を井戸から汲み上げ、元日に親元、親切等に新年のあいさつ回りを行なう。

14日 ㊄飾り取り

20日 ㊄飾り焼き（浜にて）、恵比寿講、人夫集め、今年の祝い

2 月 2月に入って初めての午の日、厄落とし。男は25歳、42歳。女は19歳、33歳。

厄年の訳落とし祈願。今年は2月2日。2月最終日曜日＝敬老会、演芸会。また、偶数月に庚申がある。

3 月

桃の節句。春分の日（墓参り）

4 月

卯月8日（墓参り）

6 月

14日 天王祭。富士講。海の安全祈願、真珠の安全祈願、豊漁祈願。

24日 豊作祈願

28日 朝熊山金剛証寺参り（新盆の家、親戚が行く）

7 月

8 月 道路清掃、草刈り（道普請）

12日 お盆（午前8時30分より）水向け、大念仏

12～15日 盆踊り

16日 精霊（しょうろ）流し

9 月 中祭 秋分の日（墓参り）

12月

1日 大祭

13日 小正月 ㊄飾り作り

29～30日 ㊄飾り付け

31日 大晦日（おおつごもり＝おつごも）、豆まき、年越し。

